

【目的】

これまで実施してきた条例認知度調査において、特に20代以下の認知度が低いことから、大学生との共生のまちづくりについて考えるワークショップを通じて、若年層への周知啓発と意識醸成を図る。

【実施概要】

実施日	令和4年11月24日（木）	令和4年12月19日（月）
大学・学科	新潟薬科大学 応用生命学科	敬和学園大学 共生社会学科 ほか
参加人数	15名（教職員演習）	約30名
主な内容	発達障がいに関する事例検討 （グループワーク）	条例に示す身近なテーマを用意し、 広く共生について考える （グループワーク）

【アンケート結果】

1. ワークショップを通じて、講義の内容や共生への認識を高めることができたか？



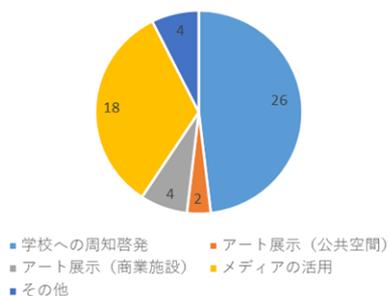
【新潟薬科大学】

- ・条例を読むだけではわからない具体的な事例が扱われており、理解が深まった。
- ・グループワークを経て、自分のことのように考えることができた。

【敬和学園大学】

- ・共生社会の実現には多くの課題があり、様々なことを学んでいく必要があるとわかった。
- ・様々なキーワードから障がい者に対する課題を深められた。
- ・漠然としたイメージにとどまった。

2. 若年層の条例認知度を向上に、どのような取り組みが必要だと思いますか？（複数回答）



【学校での周知啓発】

- ・若いうちに知る機会や学ぶ機会があることが大切
- ・学校ほど健常者・障がい者が集まる場はないため

【アート展示】

- ・目を引くアートは能動的な意識付けを生む

【メディアの活用】

- ・メディアから情報を得ることが多いため
- ・若者は広告を嫌うため、SNSでの宣伝は逆効果

【その他】

- ・幅広い分野（上記全て）からのアプローチが必要
- ・小学生の頃に視覚・聴覚障がいの体験活動をした

3. 意見・感想

【新潟薬科大学】

- ・知識だけついていても、実際に障がいのある人の立場になって考える機会はあまりなかった。とてもよい機会だった。
- ・障がいのあるなしに限らず、一人一人が他人のことを思いやって生活することが皆が生きやすい環境を作る第一歩だと思う。

【新潟薬科大学】

- ・様々な意見や考え方に触れるきっかけになった。このような場をもっと作るべき。
- ・実際に障がいのある方の声を聴いて、身の回りのことを何でも代わりにすることが必ずしもいいことではないことを知った。